2020年東京夏季五輪開会式のイメージ（日本スポーツ振興センター提供）

生まれ変わる国立競技場

屋根付き8万人収容

2020年東京五輪で「五輪スタジアム」に予定されるのは、日本スポーツの「聖地」と呼ばれる国立競技場だ。1964年東京五輪のメーン会場だった「遺産」を継承し、全面改築で現在の約5万4千人から開閉式屋根を備えた8万人収容の全天候型に生まれ変わる。招致委員会の竹田恒和理事長は「過去と未来をつなぐ五輪のシンボル」と位置付けた。

国際公募で決まったイラク出身の女性建築家、ザハ・ハディド氏によるデザインは流線形の斬新な外観で、スポーツの躍動感をイメージさせる。審査委員長を務めた建築家の安藤忠雄氏は「今後100年は世界のスポーツの殿堂になる」と、その圧倒的なインパクトの強さをたたえる。

開閉会式の舞台となり、陸上のトラックは9レーンを設置。観客席はサッカーやラグビーを実施する際はピッチ近くまでせり出す可動式となる。

五輪博物館や商業施設が併設され、コンサートなど文化イベントにも活用される。日本スポーツ振興センターの河野一郎理事長は「歴史を持つ聖火台は何らかの形で残したい」と新旧融合を図る考えを持つ。

58年に建設された国立競技場は老朽化が進み、耐震基準や国際大会開催で求められる規格に合わない問題を抱えていた。16年五輪招致では中央区晴海に五輪スタジアムの新設を計画したが、国際オリンピック委員会（IOC）から三方を海に囲まれた立地の問題を指摘された。

計画では来年7月に解体に入り、19年3月の完成を目指す。課題は総工費1300億円と見込まれる巨額の財政負担だ。

国はサッカーくじの対象をJリーグ以外の海外にも広げ、増えた収益で改築費を捻出する青写真を描く一方、東京都にも負担を求める意向。神宮球場など周辺地区の再開発も検討課題になっており、負担配分で国と都のせめぎ合いとなりそうだ。

臨海部 多数の新会場

水泳センターには2万人

競技会場は1964年東京五輪で使われた既存施設が集まる「ヘリテッジ（遺産）ゾーン」と、臨海部の「東京ベイゾーン」の2群に分かれる。臨海部には夢の島地区の「五輪水泳センター」をはじめ新会場の建設が数多く予定されている。

2万人収容の同センターは競泳、飛び込み、シンクロナイズドスイミングの舞台となる。7年後は瀬戸大也（JSS毛呂山）、萩野公介（小山市出身、作新高―東洋大）両選手ら競泳の「黄金世代」に脂が乗り、地元でのメダルラッシュに期待が膨らむ。

バドミントンとバスケットボールの会場となる「夢の島ユースプラザ」も同地区に新設される。「夢の島公園」ではアーチェリーを実施する。

観光スポットのお台場に近い有明地区には、バレーボール会場となる1万5千人収容の「有明アリーナ」が誕生する。既存の「有明テニスの森公園」は改修工事で対応する。自転車の「有明ベロドローム」と「有明BMXコース」は、「有明体操競技場」とともに仮設で対応する予定だ。

カヌー・スプリントとボートを行う「海の森水上競技場」と、セーリング会場の「若洲五輪マリーナ」も新設され、新名所になった東京ゲートブリッジで結ばれる。

宮城でサッカー 被災地も舞台に

東日本大震災の被災地も、熱戦の舞台となる。宮城県利府町の宮城スタジアムでサッカーの試合が計画されており、1次リーグの男子6試合、女子3試合が見込まれる。

同スタジアムは震災で屋根の支柱に亀裂が入るなどの被害を受けたが、昨年はサッカーのU―20（20歳以下）女子ワールドカップ（W杯）で会場の一つとなった。ことし8月には男子の日本代表がウルグアイと国際親善試合を行った。東京都スポーツ振興局招致推進部の沢崎道男・招致計画担当課長は「復興した姿を世界に見てもらうと同時に、世界中からの支援に対する返礼の機会になる」と説明した。

聖火リレーも、東北地方を縦断する計画がある。コースの詳細は未定だが、沢崎課長は被害の大きかった地域から国内外にメッセージを発信する意味で「できるだけ沿岸部を走ってもらいたい」とプランを練る。